

第6回沖繩宣教研究所・富坂キリスト教センター共同研修会 発題②

「わたし」の責任を問う

—天皇教とキリスト教の重なりの中で

大嶋 果織

はじめに

富坂キリスト教センターの運営委員をしている大嶋果織です。今年度から日本キリスト教協議会総幹事ならびに教育部の総主事代行として働いています。今日は、32年前の沖繩での出会いからずっと問われてきたことに、わたしがどう応答しようとしてきたかを振り返りながら、テーマをめぐって話したいと思います。

「出会い」が、人に新しい気づきや変革をもたらすものであるとすれば、わたしと沖繩の出会いは今から32年前の1993年初夏でした。それまでも沖繩を訪れたことはありましたが、沖繩の置かれた状況が「わたしにかかわりがある」というふうに考えるようになったのは、その時からでした。

<資料1>は、1994年6月20日から22日、沖繩ハイツで開催された「第9回日韓在日キリスト教協議会 in 沖繩」のプログラムです。この会は、韓国の大韓キリスト教教育協会(KCCE)と日本の日本キリスト教協議会教育部(NCC 教育部)が共催で1978年から開催してきたもので、第9回は「沖繩キリスト教協議会」(OCC)に協力いただき、三者で開催されました。NCC 教育部21名、韓国21名、沖繩24名、計66名の参加がありました。

わたしはその前年1993年4月にNCC 教育部に総主事に着任しましたが、前任の東海林路得子さんから、平和教育には「在日」と「沖繩」の視点が不可欠で、そこから考えない平和はありえない。「在日」はNCCのメンバーなので、すでにこの協議会に加わっているが、沖繩に関しては沖繩キリスト教協議会(OCC)にお願いして第7回から代表者に出席してもらっている。ついてはできるだけ早く沖繩に行って、OCCのみなさんと実行委員会を作って準備してほしいと言われました。それで、着任してまもなくOCCを訪ねたのです。そして、1994年の開催まで実行委員会を重ね、また、その後もOCCからこの協議会に人を送っていただき、そこから生まれたティーンズ平和キャンプにも高校生を送っていただき、交流が続きました。しかし、その後、韓国のKCCEが経済的な理由で解散してしまったため、2000年代半ばで協議会は終了となりました。

NCC 教育部が沖縄宣教研究所のみなさまのご協力を得たのは、2009年6月に銀座の教文館で、「ベッテルハイムの琉球伝道」をテーマに公開講演会をした時のことです。琉球大学の照屋善彦さんが講演、沖縄バプテスト連盟の饒平名長秀さんが発題をしてくださいました。その際、日本聖書協会はベッテルハイム訳の聖書の特別展示をしてくださいました。また、2月6月に那覇で持たれたベッテルハイム関係の集会にはわたしも参加させていただきました。

詳細は省きますが、こうした出会いを通して私が問われたのは「自分の場所」で、何とどう闘うのかということです。沖縄の皆さんから何度も言われたことは、「沖縄に来なくてもいい、自分の場所でどう闘っているのかが問題だ」ということです。独自の歴史と文化を有する沖縄を、勝手に「処分」して日本に組み入れ、沖縄の言葉や文化、歴史を否定してヤマトに同化させようとし、太平洋戦争では「本土防衛」のために沖縄を「捨て石」にし、戦後は自分たちは主権回復しながら、アメリカに沖縄を差し出し、その後も沖縄をアメリカの支配のもとに置き続け…。以下、全部「 」つきですが、沖縄が「日本」に「復帰」したあとも、米軍基地をはじめとするさまざまな理不尽を沖縄に押しつけ続けてアメリカにおもねている「ヤマト」の人間として、自分の場所で闘うとはどういうことか。これがわたしの大きな課題になりました。

昨年、今日の発題を頼まれて以来、何をお話すべきか考えてきたのですが、やはり、32年前の出会いの中で問われたことにどう応えようとしてきたのか、それを話すしかないと思いました。今からお話することは、現在の沖縄を含む南西諸島の軍事拡大の現実の中で、何を悠長なことを言っているんだと叱られるかもしれません。準備の回でも、具体的に何をしているのかという問いかけがありました。ヤマトにも南西諸島の軍事化に反対する活動はいろいろと展開されていますが、わたしの参加度はそれに比べられるようなものではありません。むしろ、自分の現場でささやかな試みではあっても、ヤマトの人間としてのわたしのありよう、社会のありようをどんなふうに変革しようとしてきたか、またこれからの課題は何かということをお話することにします。これが沖縄の状況とどう関係があるんだと思われる部分もあると思いますが、ヤマトの問題はすべからず沖縄への搾取 / 抑圧の原因になっていると思いますので、忍耐して聞いていただければありがたいと思います。

1. 日本日曜学校運動史編纂に取り組んで知ったこと

①日本基督教連盟（1923年設立、教会合同運動団体、現NCCの前身）と日本日曜学校協会（1907年設立、信徒運動団体、現NCC教育部の前身）の関係

わたしは1993年度から2012年度まで、日本キリスト教協議会教育部で働きました。今日は、2007年の設立100周年記念事業として取り組んだ歴史編纂から気づいたことを話します。なお、歴史編纂の成果は『教会教育の歩み 日曜学校から始まるキリスト教教育史』（NCC教育部歴史編纂委員会編、教文館、2007年）、DVD『日曜学校から始まるキリスト教教育の歩み』（NCC教育部 2007年）として刊行され、2017年の平和教育資料センター開館につながっています。

NCC教育部の前身は、1907年に設立された日本日曜学校協会です。戦争前、沖縄も含めて日本全国、ほとんどの日曜学校がこのネットワークに加盟していました。日曜学校の数は教会の数より多かったのです。子ども好きの信徒が自宅で行っていた日曜学校もたくさんあったからです。信徒運動としての日曜学校運動は非常に盛んになり、日曜学校に取り組む信徒たちの、教派を横断したネットワークが日本日曜学校協会でした。

一方で、教派やキリスト教団体のネットワークもできました。1923年に設立された日本基督教連盟、現在のNCCの前身です。この連盟には、戦前の最大教派であった日本基督教会、日本組合協会、日本メソジスト教会など9教派、YMCA、YWCAなどのキリスト教団体8つが加盟しました。

教派・団体が加盟し、教職がリーダーシップを握る日本基督教連盟と、各地の日曜学校が加盟し、信徒のリーダーシップで動く日本日曜学校協会。両者の間にはあきらかな権力関係がありました。どんな関係だったかを象徴的に示しているのが、1931年に日本日曜学校協会が東京神田の一等地に建設した鉄筋コンクリート建ての「日曜学校会館」の名前をめぐる顛末です。

<資料2>は、日曜学校会館の献堂式を報告する1931年の記事です。この記事には、長年「『日曜学校会館』を建てよう」を合言葉に、日曜学校関係者が東奔西走して募金を集めてようやく完成した「日曜学校会館」を、「キリスト教会館」という名称で献堂したと報告されています。なぜ、「キリスト教会館」という名称にしたのか。それは、日本基督教連盟から頼まれたからです。慣れ親しんだ「日曜学校会館」が「キリスト教会館」という名称になる。こんなに苦労して建てたのに、まるで宝を奪われたような気がする。しかし、しかたない。教会なくして日

曜学校はない。<資料2>の矢印のあたりをご覧ください。「親の姓をそのまま冠することができたのは慶すべきことだ」こう言っています。言い換えれば、日曜学校は子であり、教会は親である。子が親の言うことを聞いて、奉仕するのは当たり前のことだと言っているのです。

親が子の活躍を支援するという関係ではなく、子が親のために犠牲になるという非常に家父長主義的な関係を日本基督教連盟と日本日曜学校協会の関係に見ることができます。言い換えれば、牧師と信徒の関係がそうであったということでもあると思います。

②日本基督教団（敗戦前の日本のプロテスタント諸教派合同）は日本日曜学校協会つまり「信徒運動」あるいは「女・子ども」の居場所を犠牲にすることにより成立

このような関係が続いたらどんなふうになるか。そのことをわからせてくれるのが、1941年の日本基督教団成立です。

日本基督教団は1941年6月24-25日、富士見町教会で「30余派」のプロテスタント教会が集まって設立総会を開催します。しかし、文部省から宗教法人認可を受けたのは同年11月24日でした。

なぜ法人認可が11月24日なのか。それは設立総会を開催したものの、さまざまな書類を整える必要があり、申請が遅れたためです。そのさまざまな必要書類の一つが、日本基督教団認可のための必須条件だった教団の基本財産の証明です。30余派の教会が合同したとはいえ、どうやって基本財産を作るのか。白羽の矢がたったのがキリスト教会館、通称日曜学校会館を所有していた日本日曜学校協会でした。最大教派だった日本基督教会が基本財産を提供してもいいのに、あるいはYMCAやYWCAが提供してもいいのに、なぜ日曜学校協会が財産を投げ出さなければならなかったのか。そこには、先に見たような親子関係があると思います。教会は親、日曜学校は子。いざというときには、親が子を守るのではなく、子が親のために犠牲になる。日本のキリスト者の根っこにあるのはそのような家父長主義的価値観でした。その結果、日本日曜学校協会はキリスト教会館をはじめこども賛美歌の著作権など一切の財産を日本基督教団に寄付することを決め、自ら解散したのでした。

<資料3>は、日本日曜学校協会理事長から11月13日付け文部大臣あての財産処分寄付の届け出と11月24日付文部大臣からの処分認可の書類です。この財産寄付により、同日付けで日本基督教団に法人認可が下りました。日本基督教団に

は同じ日付の法人認可の書類があるはずです。

解散した日曜学校協会は日本基督教団に編入され、その日曜学校局になりますが、信徒はリーダーシップから排除され、信徒運動としての日曜学校運動は終わりを告げました。日曜学校は本来子どもだけが対象ではありませんが、実際には子どもが対象で、主な働き手は女性たちでした。いわば女性が活躍できる、子どもの居場所としての日曜学校は日本のプロテスタント教会の生き残りのために犠牲になったと言えます。

③敗戦前の教会の日本建国神話と建国理念の受容、国策協力の実際

そのようにして成立した日本基督教団は、日本基督教会が発行していた日曜学校教案誌と日本日曜学校協会の教案誌を統合して、1942年1月から「教師の友」を創刊します。その創刊号の表紙には、「紀元2602年」と神武天皇紀元の年号が刻まれていました。

<資料4>は、創刊から2月目の教師の友に掲載された「紀元節」の説教例です。冒頭と最後の部分を読んでみましょう。→を入れた部分です。

「近く紀元節を迎えるにあたり、世界をお造りになった神様が特に我が国のような立派な国に私どもを生まれさせてくださった事を心から感謝せずにはおれません。」

「神武天皇が大八州をしろしめさんとして檀原に都をお定めになった時、『八紘一字』天下を一つの家として親しもうではないかと仰せられ、今上陛下も日独伊三国が条約を結んだ時、この度の戦は世界の国々をみんな自由にして、今迄のように強い国にいじめられている国をなくし、人民を皆安楽にしてやるための戦だと仰せられ、日本が如何に立派なことを考え行っているかを世界にお示しになりました。多くの兵隊さんはこの目的のために戦っているのであります。私たちも早く立派な世界が出来上がることを祈り、その為に私たちもめいめい日本帝国臣民として恥じない者になるために、ますます神様の教えに従い、光の子となるよう励みましょう。」

ここからわかることは、当時の教会は全体として一個別には抵抗した人もいたでしょうけれども一神武天皇の建国神話と建国理念を受容し、「八紘一字」、世界を、男系男子で受け継がける万世一系の天皇を中心とした、一つの家のようにしていくという、まさに家父長主義と植民地主義という二本の柱を体現した共同体だったということです。今はどうでしょうか。

去年の共同研修会で外間永二さんが、日本基督教団と沖縄キリスト教団の合同

に関して、対等な合同ではなかったということなぜ日本基督教団は反省して、捉えなおしをしないのかと提起されています。そして、「日本基督教団は植民地主義の枠の中に教会が存在し、植民地主義神学によって教会が成立していると言えるのではないかと思います」と。わたしは「植民地主義」に「家父長制」を足したいと思います。「家父長制」と「植民地主義」、「八紘一宇」を建国の理念とした戦前を今なお、教団は脱出できていないではないか。教団成立時に解散せざるを得なかった日本日曜学校協会の歴史を受け継ぐものとして、成立時の問題を問いつけていくことが課題ではないか。そう、わたしは思っています。成立時の性格を問いつ直し、反省して出直さない限り、沖縄キリスト教団との合同の捉えなおしもできないでしょう。根本からやり直すことが課題である。そこに取り組んでいくことが、沖縄からの問いに答えることにつながるのではないかとわたしは考えています。

2. 女性史編纂の過程から問われたこと

さて、ふたつめです。わたしは神学校での性暴力に関連する非常に腹立たしい経験から女性差別に関心を持つようになり、1980年代の終わりごろから女性たちの性差別に抵抗する運動にも参加してきました。そこで経験は割愛して、今日は富坂キリスト教センターで取り組んだ二つの女性史編纂一ひとつは厳密にいうと女性史というわけではありませんが、女性史の側面を強くもっています—の過程で問われたことを話したいと思います。

①富坂キリスト教センター「沖縄における性暴力と軍事主義」研究会（2014-2017年度、座長：山下明子）に主事として関わって

2013年に、女性運動の中で出会った長い付き合いのある山下明子さんから、この研究会の企画を聞かされ、主事として関わってもらえないかと打診されました。座長は研究会全体のまとめ役、主事は委員会の研究メンバーでありつつ、会計や書類のまとめ等、実務を担当します。

わたしはまず、沖縄で起こっている性暴力や沖縄支配の根っこにある軍事主義に対して責任があるヤマトの人間が、沖縄の女性たちが参加するこのプロジェクトにかかわることが許されるのだろうか、沖縄の女性たちが主体になるべきで、ヤマトのわたしは参加するべきでないのではないかと思いました。しかし一方で、沖縄の状況は知らねばならないし、知らされねばならないとも感じました。

NCC 教育部の協議会后、しばしば沖縄を訪れるようになっていたわたしは、沖縄に来ると書店巡りをして、「本土」の書店にはない沖縄固有の出版物を手取るようになり、沖縄の女性史や沖縄の宗教等、ヤマトとは異なる歴史、文化、課題に触れるようになり、もっと情報が必要だと思えるようになっていました。そして、そもそも私が研究会でもっと学ばなければならないのではないかと、最終的には研究会の主事を引き受けることにしました。研究員8名のうち4名が沖縄の女性、一人が在日コリアン、三人がヤマトの女性でした。研究会は沖縄と東京と交互で行い、沖縄で行うときはフィールドワーク、東京で行う時は公開講演会を開催しました。結果的にわたしが一番苦しんだのは、このテーマに関してわたしが何を研究するかということでした。結果的に、日本軍「慰安婦」問題の解決に向けて取り組んだ、東海林路得子さんを研究テーマに取り上げたのですが、その経緯をこんなふうに書きました。

「筆者はこの研究会において、沖縄の女性の歴史や現実に直面させられながら、ヤマトのキリスト者女性としてどのような姿勢でテーマ『沖縄における性暴力と軍事主義』にかかわっていけるのか、自問自答してきた。鄭暎恵の『差別と闘う責任は、被差別の側ではなく、差別構造を作り出し、温存する側にこそある』という指摘はまったくその通りで、だからこそ『マジョリティが前面に立って、自らが依拠する構造と闘う』ということとはどのようなことか、考え続けてきた。今も答えを出せたわけではないが、『慰安婦』問題の解決に向けて真摯に取り組んだ東海林の生き方から、マジョリティの側にいる日本人キリスト者は学ぶことがあるのではないかと思う」。

東海林路得子研究からは「天皇制」というヤマトの差別の構造と、それにどう抗っていくかということが「自らが依拠する構造と闘う」ということだということを確認したと思います。でも、最初にわたしが感じた問い、搾取している人と搾取されている人がどう一緒に活動できるのか、特に搾取している側がリーダーシップを取っていいのか、よくないんじゃないかという思いは残っています。なお、この研究会の成果は、2017年に『沖縄にみる 性暴力と軍事主義』という書名でお茶の水書房から出版されました。

②研究会「日本におけるキリスト教フェミニズム運動史—1970年代から現在まで」に座長として取り組んで

さて、東海林路得子研究に取り組んでいるうちに、わたしは、フェミニスト運

動の記録を残さねばならないと思うようになりました。日曜学校運動の歴史編纂の経験も影響していました。キリスト教史と言えば、大人の男性の言葉や行いの積み重ねです。日曜学校運動の歴史編纂するとき、子どもに関する活動の資料が失われていてどんなに苦労したことでしょう。女性の声や女性の取り組みも残さねばなりません。そこで、今度はわたしが提案し、座長として表題の研究会を発足させることになりました。2019年春から2022年秋まで、研究会は3年半続きました。

わたしの関心は、過去のフェミニスト運動の積み重ねを新しい世代につないでいくということにありました。そのため、異なる世代が研究会に入ることを優先させました。その結果、これは前書きで書いたのですが、研究員の所属教派は日本基督教団中心で、ヤマトの間ばかりになってしまいました。つまり、視点が偏ってしまったのです。

振り返ってみれば、日曜学校の歴史編纂では、5名の編纂メンバーのうち2人が在日でした。でも、在日がいたのに、在日の視点からは歴史はどう見えるか、そして、それを日本人の視点とどうかということを意識にのぼらせることができませんでした。そのために、やはり日本人の日曜学校教会中心の歴史になってしまったと思います。

限界のある中で、研究会はどうかしてマイノリティの視点を反映させようと取り組みました。在日の経験を記録に留めたいと申英子さんにインタビュー、呉寿恵さんに講演、そして、沖縄の高里鈴代さんに講演をお願いし、それを成果物に収録しました。思い返してみれば、前述の『教会教育の歩み』には沖縄の饒平名長秀さんの論考、在日の李清一さんの論考を掲載しました。これをみなさんはどう思われるでしょうか。その時はそんなつもりはなかったのですが、今、わたしは、大きな日本のキリスト教史にマイノリティの文章を配置することで、マイノリティの経験を大きな歴史に回収してしまったのかもしれないとも感じています。『沖縄にみる性暴力と軍事主義』でも、半数は沖縄の方が書いているのですが、山下さんとわたしが前書きと後書きを書くことで、結局まとめているのはマジョリティとも言えます。しかし、一方でこうした取り組みがなかったら、それもやはり大切な歴史が抜けてしまうと思うのです。つまり、わたしは歴史編纂の取り組みを通して、大きな葛藤を抱えることになりました。

中心ができると周縁ができる、ということです。では、どうすればいいのか。

中心を常に移動させていく。あるいはたくさんの中心を作っていくしかないの

かもしれません。言い換えれば、his story でも her story でもなく、my story の積み重ねが必要なのではないかと思えます。

歴史や文化を異にする人たちへのさまざまな形での収奪、すなわち植民地主義をどう意識化し、どう乗り越えていけるのか、大きな課題としてわたしの前に横たわっています。

3. 令和書籍『国史教科書』を読んで気づいたこと

歴史を編むって難しい。どのようにしたら、マジョリティが自分たちの歴史を批判的に検証しながら、過去を見つめなおすことができるのだろう。それが今を変えて今土台になるというのに…。と、頭を抱えていたら、ショッキングな出来事が起こりました。昨年 2024 年 4 月、令和書籍の『国史教科書』が文科省の教科書検定に合格したのです。

<資料 5> はこの検定合格に対して、NCC 教育部と全国キリスト教学校人権教育研究協議会が連盟で出した抗議文です。そこにあるように、この本は、最初から最後まで「皇国史観」に基づいた歴史を教えようとするもので、まるで戦前の教科書のようなのです。ちなみに最近では、戦前の歴史や修身の教科書の復刻版が、かつてはこんなに素晴らしい教科書があったという立場から次々に発行されています。

①天皇教布教の書としての『国史教科書』

具体的にどんなことが書いてあるのでしょうか。共通理解を持つために、この本の中から「第 1 章原始」の中の「三 弥生時代」の一部を紹介します。たとえばこんなふうにあります。

「邇邇芸命（ににぎのみこと）は、山の神の娘二人を娶りましたが（略）、その命は花のように儂いものになってしまったのです。これは、神である邇邇芸命に寿命が与えられたことを意味します。それ以降、邇邇芸命の子孫はみな限りある命となりました。これが、天皇の先祖が神から人になった瞬間です。しかし、神から人になったとはいえ、神としての性格は保持したままと考えられてきました。そして、鷓鴣草葺不合尊（うかやふきあわせずのみこと）がもうけた子が神日本磐余彦天皇、まもなく初代の神武天皇に即位される方です。（略）

『日本書紀』によると、神武天皇は橿原に都を定めるにあたり詔勅を発せられました。ここには「八紘為宇」という我が国の建国の理念が示されています。日本

列島の人々が、あたかも一軒の家に住むように仲良く暮らすことを国の理想とする考えです。この建国の理念が、歴代天皇によって継承され、現在に至るのです。(略)」

わたしはこれを読んで、なぜ、戦前天皇が現人神と呼ばれていたのか、初めて理解できました。邇邇芸命の時に人になったけれども神の性格は引き継いでいたというのです。天皇はその神の性格を今日に至るまで引き継いでいると。さらに次のページには、神武天皇の詔勅が紹介されています。そして、2月11日は神武天皇の即位を祝う「建国記念の日」だと説明されています。以下、引用です。

「(読み下し文) 六合(りくごう)を兼ねて都を開き、八紘を掩(おお)いて宇(い)えと為さん事、亦(また)可(よろし)からずや。

(現代語訳) 四方の国々を統合して都を開き、天下を覆って我が家とすることは、はなはだ良いことではないか。」

つまり、『国史教科書』では周囲の国々を統合して天皇中心の国にすることは建国の理念にかなうことなのです。したがって、この教科書には北海道や琉球を国土に組み込んで支配すること、台湾や朝鮮を我がものにして支配すること、アジア諸国への戦争加害に対する反省はみられません。北海道や琉球支配は日本の領土を守るため、朝鮮植民地化は大韓帝国皇帝から依頼されたもので、日本は犠牲を払って韓国の近代化に貢献したと述べられ、日本軍「慰安婦」については、強制性や戦場の連れまわしを否定して、これまで資料で明らかにされたことを全く無視しています。沖縄戦については、沖縄を守るために特攻作戦で若い人たちが「散華」したとされ、中学生や高校生の学徒隊への「志願」が強調され、民間人は逃げ場を失って自決したというふうに、沖縄がいかにヤマトに利用され、捨て石にされたかという視点はゼロです。

こうした同化政策賛美、戦争賛美の歴史観を土台で支えるのが、『古事記』『日本書紀』の神話、伝説、伝承です。『古事記』『日本書紀』は皇国史観(日本は天孫である万世一系の天皇に導かれて発展してきた世界一優れた国であるという歴史観)に立つ人々の「聖書」のようなものなのだと思います。

いみじくも、この教科書の前書きには、世界の国々の中で日本だけが唯一、3世紀の大和王権以来、一貫してひとつの王朝が続いてきたと述べて、つぎのよう

にあります。

「では歴史上、国家興亡が繰り返されてきたにもかかわらず、なぜ我が国はヤマト王権成立以来の長きにわたり、一度の王朝交代や国家の入れ替わりもなく今に至るのでしょうか。その答えは、諸君がこの教科書をしっかり読み、自分で興味をもったことを調べ、そして友達と議論して、自分の力で発見してください」。

この教科書を無批判に読んでいくと、どんな答えに行きつくでしょう。「男系男子の万世一系の天皇が統治してきたから」という答えに行きつきます。「天皇によってこの世界は救われる、理想世界がくる」という結論になるのです。これは一つの信念、信仰です。わたしたちは「天皇制」というけれども、その中身は「宗教」なんだ。わたしは令和書籍の『国史教科書』を読んでいて、そう思いました。そこで、今回のテーマに「天皇教」という言葉を使ったのです。

②天皇教とキリスト教の類似性

なによりもショックだったのは、この本を読みながら、これ、聖書みたい、あるいはキリスト教入門書を読んでいるみたいと感じたことです。構造がキリスト教にそっくりなのです。

たとえば、『国史教科書』に女性はほとんど登場しません。わたしが読んだ限りでは、卑弥呼、臨時扱いの女性天皇、紫式部、西郷隆盛の母だけかと思えます。歴史叙述は、男性天皇をはじめ力のある男性の事績、功績でなされています。ご丁寧にも、「男系で継承されてきた皇統」というコラムがあって、「男系」へのこだわりが明確です（ちなみに、女系が認められればよいという問題ではありません）。「皇統譜」は「アブラハム、イサク、ヤコブの神」「男性による使徒継承」を思い出させます。「慰安婦」問題を扱った「蒸し返された韓国の請求権」コラムは悪意を感じさせます。妻や母としての女性の存在は許せるが、権力行使したり、主張する女性は許せないのでしょうか。「聖書」の中には女性も出てくるけれど、登場する女性はステレオタイプです。祈る女、従順な女、母、妻、そうでなければ権力を振りかざす悪女や「娼婦」です。それらに当てはまらない女性の場合は、ステレオタイプの女性のイメージに押し込める形で解釈されてきました。

また、天皇教は、神話、伝説、伝承がアイデンティティの核になっています。神々が日本列島をつくり、その子孫が天皇に即位し、すばらしい国造りをした。その一員であることがわたしたちの誇りというふうに。キリスト教も創造神話を大切にします。神が土から人をつくり、その息を吹き込んだので、人は生きるものとなっ

た。人は神の姿に似せて作られたなど、人間の尊厳の意味を神話の中に見出しています。

神話や伝説、伝承がアイデンティティの核になるというのは、宗教として当たり前のことなのかもしれません。しかし、そうした神話や伝説、伝承を史実をないまぜにして、歴史を教える手法は問題なのではないかと思います。例えば、『国史教科書』では、先ほどみたように「弥生時代」の項目に『古事記』『日本書紀』の神話が混ぜ込まれています。わたしはそのような歴史叙述の仕方を見て、自分の説教や授業の在り方を反省させられました。『聖書』の中のアブラハム物語や出エジプトの伝承をあたかも史実のように、歴史に混ぜ込んで語ってこなかったかと。また、都合のよい部分だけを取り上げて、そうでない部分は無視してきたのではないかと。「抑圧から解放する神」を伝える出エジプト物語は積極的に取り上げても、その後のカナン征服物語をどう読むか、そこに現れた先住の民の皆殺しを命じる神については口をつぐんできたのではないか。『国史教科書』を批判するのなら、それを反面教師にして、わたしも自分の『聖書』の扱い方を見直さねばならない。そう思ったのです。

もう一つ、例を上げると、『国史教科書』では、天皇は民を思い、民に仕える天皇として描き出されています（例えば、仁徳天皇、京都御所、明治天皇などに関するコラム）。読んでいただければわかると思いますが、その描き方は、自らを犠牲にして人間を愛するキリスト教の神のイメージを彷彿とさせます（このイメージが、日本のキリスト教に独特の表現の仕方なのかどうかはわかりませんが）。まだまだあるのですが、時間の関係で割愛します。

「女性であるわたし」を意識しながら読むと、聖書の神は決して、女性としてのわたしを救う神でも解放する神でもない。むしろ女性を家父長制の支配に縛り付ける神です。今回の共同研修の大きなテーマは、「植民地主義と神の国の宣教」ですが、わたしはそうした「神」「ヤハウェ」の支配する国は遠慮したいと思います。

なお、本筋から離れますが、わたしは「神」という訳語に疑問を持っています。ヤマトの人間は天皇教の「神（カミ）」が支配する国で生きているので、「神（カミ）」と区別できる訳語が必要なのではないか。少なくともヘブル語聖書で用いられている「ヤハウェ」を使うべきなのではないかと思います。

むすび ― もう一度、「自分の場所で闘う」ことを考えてみる

最後にもう一度、わたしが沖縄との出会いの中で突き付けられた課題、「自分の場所で闘う」ということについて考えてみたいと思います。

①神や聖書を絶対化しないということ

わたしがしなければならない闘いの一つは、神や聖書を絶対化しないこと、そして、教会の中の差別と闘うことだと思います。自分の拠って立つ場所の差別構造と闘えなければ、どうしてこの社会の差別構造と闘うことができるでしょうか。「沖縄」を差別し収奪しているヤマトの自分が、自分を縛っている差別的価値観から解放されることがまず必要だと思います。それは「わたし」を大切にすることでもあります。

わたしは聖書を読み直すということについて、1980年代から各地で始まったわたしの会に励まされてきました。最近ではつい先日（2025年2月12～15日）、大阪にある在日韓国キリスト教会館を会場に第6回（通算第26回）在日日韓女性神学フォーラムが開催されました。この会は韓国・在日・日本の女性たちによるボランティアな回で、30年近く続いています。必ず聖書研究の時間がありますが、今回、韓国の女性は「サムエル記下」21章1～14節を選んで発表しました。この箇所の流れは、以下ようになります。「飢饉が起こる→サウルによるギブオン人殺戮が飢饉の原因との神託がある→ダビデはサウルの子と孫7人を贖罪として処刑し、野ざらしにする→七人の母リツパが彼らの遺体を見守る→ダビデは七人の骨を埋葬する→飢饉が解決する」

わたしはそもそもこの箇所に注目したことがなかったので、このテキストが選ばれたこと自体がとても新鮮でした。さらに、発表に続き、次のような自由な意見交換がなされました。「白骨化していく遺体とそれを見守るリツパの行為は、埋葬という人間の最低限の権利さえ許さない法と制度の非人間性を告発している。長生炭鉱の犠牲者の遺骨発掘ら取り組む活動、沖縄での遺骨収集の活とつながる物語だと思う。「やっぱりダビデは立派だったと結論されているように感じる。英雄物語に挿入された涙を誘う母親物語ではないか。彼女のその後は？息子を殺された彼女の痛みはどこへ？」「ダビデに託宣する神は、流血の罪を流血で贖うことを要求する冷酷な神、リツパに応える神は 律法に縛られない自由な神ではないか」など。

このように、それぞれの読み方を出し合うことは、神や聖書の絶対化からわた

しちちを解放することにつながると思っています。従順ではなく、自立する力を得ていくために必要なことだと考えています。

②教育の場に出会いを作り出すこと

わたしはこれまで、教育の場で働いてきました。1993-2012年度は日本キリスト教協議会（NCC）教育部で、2013-2023年度は大学教員として。そこで大切にしてきたことは、出会いを作り出すということです。大学教員時代は群馬県にいましたが、群馬県の若者にとって沖縄はとても遠いです。身体的距離も知識的距離も心理的距離も。沖縄の歴史を学び、現状を学ぶことでは縮められない距離です。その距離をどう縮めるのかということがまずは課題でした。

試行錯誤の末、わたしが意識するようになったことは、まずは身近にある差別の構造に気づくということです。性差別、セクシャルマイノリティ差別、障がい者差別、在日外国人差別、部落差別…全て学生のあいだに、大学の中に、暮らしている町の中にある差別です。差別や収奪に敏感になり、それに怒りを感じる人権意識を持てるようになると、沖縄の現状を知った時、その不条理を理解できるようになります。怒りはアクションにつながります。そういう流れを作るために、出会いの場を作り出すことを大事にしてきました。

③エキュメニカル運動の場で平和への取り組みを進めること

わたしは今年度から日本キリスト教協議会（NCC）で事務局の責任を負っています。わたしの責任はそれぞれの課題を担う委員会や部の活動を支え、国内外の関係団体と協力すること。そうすることによって社会の、ならびにキリスト教内部の右傾化にあらがひ、平和への歩みを少しでも推し進めることであろうと思っています。

昨年（2024年）2月20-22日、安里カトリック教会（那覇市）を会場に「第8回9条世界宗教者会議」（テーマ「憲法9条とアジアの平和～沖縄からの祈り～」）が開催されました。世界宗教者会議としてはこの第8回でいったん区切りとなりましたが、今後、NCCが若い人を中心に非暴力トレーニングなどの新しい取り組みを続けていくことになっていると聞いています。取り組みを担っていきたいと考えています。

以上

参考資料

資料1 第9回日韓在日キリスト教教育協議会報告書より

1994年6月20 - 22日、韓国キリスト教教育協会(KCCE)、沖縄キリスト教協議会(OCC)、日本キリスト教協議会教育部(NCC 教育部)の共催で開催した。テーマは「キリスト教教育と平和」。KCCE から22名、OCC から24名、NCC 教育部から21名参加。この回から名称に「在日」が入った。

第9回 日韓在日キリスト教教育協議会 in 沖縄 プログラム

主会場 沖縄ハイツ

1994年6月20日(月)		21日(火)		22日(水)	
		7:00	開会礼拝 KCCE会長 李正一牧師 オリエンテーション	7:30	早天礼拝 在日大韓基督教会 朴珍烈牧師
		8:00	朝食	8:00	朝食
		8:45	全体写真		
		9:00	発題(各40分) ①韓国から KCCE副会長 辛慶夏氏 ②日本から 神学博士 武田利邦氏 ③在日から 在日大韓基督教会 呉寿恵氏 ④沖縄から 沖縄キリスト教協議会 金城重明氏 (途中ブレイク20分)	9:00	全体協議 (2日間の学びを 深めるために)
				11:00	ブレイク
				11:30	活動報告 KCCE 車総務 NCC 大嶋総主事 OCC 饒平名議長
12:00	空港集合 出発	12:00	全体質疑	12:15	昼食
		12:45	出発(昼食) 中部戦跡巡り (神懸・平和・文化) チビチリガマ・象のおり トリステーション 嘉手納飛行場(戦跡めぐり) 織物・焼物 座間味城跡・資料館	13:00	全体協議 (次の2年に向けて)
13:00	昼食 南部戦跡巡り (神懸・平和・文化) ひめゆりの塔 " 資料館 韓国人慰霊塔 (祈禱会) 琉鳩の塔	17:00	帰着	14:00	閉会礼拝 日本バプテスト連盟 伊藤世里江牧師
		18:30	夕食	14:30	終了
18:00	沖縄キリスト教協議会 到着 歓迎レセプション	19:30	特別講演 「神懸の歴史と文化」 読谷村史編集委員 渡久山朝章氏	15:30	23日「慰霊の日」 オリエンテーション
21:00	沖縄ハイツ着 オリエンテーション				

資料2 月刊誌『日曜学校』1931年6月号より

東京の神田錦町に「日曜学校会館」(鉄筋地上4階地下1階)完成の報告記事。日本基督教連盟の申し出により、名称を「キリスト教会館」としたことに対し、「宝を薦にとられたよな」と言いつつ、教会は日曜学校の「親」だから、「子」が親のために奉仕するのは当然と納得しているところが興味深い。

會館成る

大正九年以來十年、待ちに待ち、望みに望んで居つた會館は新緑の色も漸く深くなつて来た六月、純白の衣に鐵筋の骨をひいて、ゴバルト色曇き初夏の空に氣品の高く新粧を了へて、子供の日曜間の火曜日と云ふ十六日、名も日曜學校の母體教會の名によりて基督教會館と銘じて獻堂式を挙げました。

此の爲めに十年の苦勞を共にせられました日曜學校同勞者諸兄弟姉と共に仰いで天父の慈恵に感謝し、伏して我らを授けたる地下の友情、感激を禁じ難はぬものであります。

去る日溢澤子爵に工事着手の報をもたらしお訪れをした山本理事長と自分とに「さすがは基督教信者の方々の御仕事だ。十年間、その的をかせず、苦心努力、遂にこれを實現せらるゝに至つた事は、唯感謝する外にない。失禮ながら自分は老年の事として、已に忘れて居りました」と語られました。茲に出來たものは當初の半ばを實現し得たに過



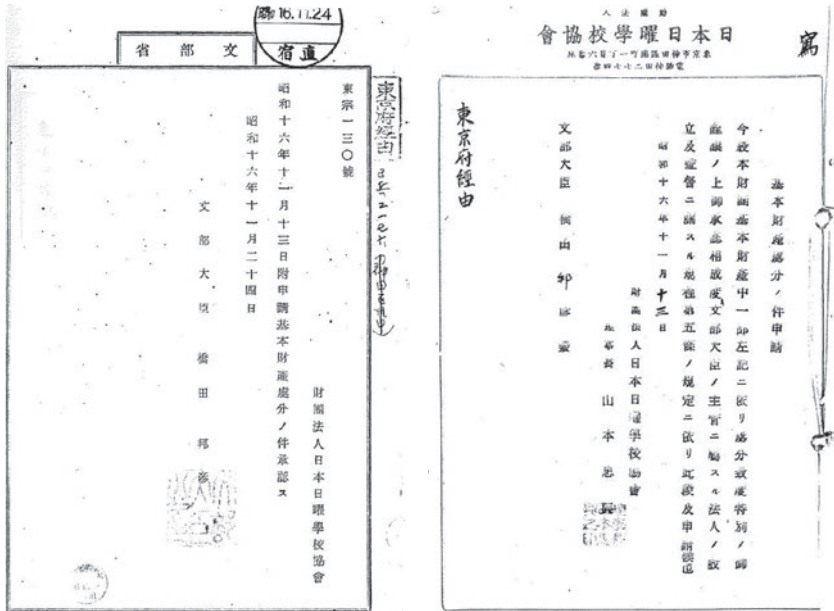
ぎませんが、一面に於て是は實に我等の一半を兎に角實現せしめたのであつて、残る一半

有志の方々の責任となつて居るものであると云ふてもよろしいのであり、即ち我等の意圖を従して金銭を寄せて下された方々に對する謝意は、我らの使命について深く思ひめぐらす時に、我らは大いなる責を嗣いだと云ふべきであると信じます。勿論、多年日曜學校會館の名に親しみ、日曜學校事業を當前の使命として居るもの、我等にとつて一面切角の費を薦にとられた感がないでもないでもありませんが、日曜學校は教會のためです、教會から離れて日曜學校はない。この日曜學校運動がはからずも全國の教會のために御奉仕するやうになつた。名も親の姓をそのまゝに掲げる事が出來たことは感謝すべきであり、應すべき事でもあります。

者の言葉を全ふしたのであります。更に此を獻ぐるに日曜學校の母體であり、その主である基督教會の名に於てしたと云ふ事は、我らの使命について深く思ひめぐらす時に、我らは大いなる責を嗣いだと云ふべきであると信じます。勿論、多年日曜學校會館の名に親しみ、日曜學校事業を當前の使命として居るもの、我等にとつて一面切角の費を薦にとられた感がないでもないでもありませんが、日曜學校は教會のためです、教會から離れて日曜學校はない。この日曜學校運動がはからずも全國の教會のために御奉仕するやうになつた。名も親の姓をそのまゝに掲げる事が出來たことは感謝すべきであり、應すべき事でもあります。従つてこの會館建築費不足額の募金についても充分教會の御助けを頂き、日曜學校教師職員方の最後の御奔走により、教職員御一同から御同席を頂いて、全國基督教會の館を本當に斑點なく創なきものとして仕上げたいと存じます。希ば大方諸兄弟姉の御同情と御協力とを得てこれを全ふすると共に、廣く協力の実を現はしてこの館が他日我が國に於ける基督教文化運動の一大中心となる事の出來ますやうに、獻堂の喜びを皆様に御傳へすると共に、一層の結束を我らの祈りと勵みに實現せられん事を願ひする次第であります。

資料3

1941年6月24 - 25日日本基督教団創立総会が開かれたが、文部大臣から宗教法人認可を得るためには基本財産所有が必須条件だった。結局、日本日曜学校協会が解散して全財産を日本基督教団に寄付することにより、1941年11月24日、教団の法人認可が下りた。下は財産処分(寄付)申請書と文部大臣の承認の書類。日本基督教団の法人認可日は1941年11月24日だが、日本日曜学校協会の解散も同日。「30余派の福音主義教会」の「合同」として教団が設立されたことは沿革に記されているが、教会の生き残りのために信徒運動である団体が解散したことは書かれていない。「子」が「親」の犠牲になるのは当たり前だったからか。



資料4 日本基督教団『教師の友』皇紀2602年(1942年、昭和17年)2月号より紀元節説教例
なお、『教師の友』の前身『日曜学校』誌に「紀元節学科」が登場したのは1928年から

◎美はしき日本 二月八日

奏樂 讃美歌 四一二又は四一三
聖書朗讀 箴言十四・三四
説教 新約 福音書の御霊がたもよほして下さる

讃美歌 日讚二二二

説教

近く紀元節を迎へるに當り、世界をお造りになつた神様が特に我國のやうな立派な國に私どもを生れさせて下さいました事を、心から感謝せずには居られません。

日本といふ國が世界の人々に紹介されたとき、人々は東洋には櫻咲く夢の様な美しい國があるさうだ。一度行つてみたいものだと思つても、憧れて續々やつて來ましたが、來た人々は皆この國の美しさにうつとりして、これは世界の公園だといつて名残惜しさうに歸つて行きました。こんなに私たちの住んでゐる國は美しい國でした。

ところが世界の人たちはこの美しい國が又とてつもなく強い國であることに氣付き初めました。小さいと思つて軽く見てゐた國が、世界の大國支那、ロシアなどを打破り、向ふ所敵なき姿をみだつて強いのだから。或人はそれはお米を食べるからだ、などといひました。然し流石にヒットラーは正しい所に目をつけ、「それは日本が萬世一系の天皇を戴いて世界に類のない立派な國體をもつてゐるからだ」といつて羨ましがりました。我々は大昔から忠君愛國を教へ込まれ、それが我らの血となり肉となつてゐますので、一朝事あれば滅私奉公、正義の爲、眞理の爲に全てを捨てて出てゆくのです。何といふ美しい心でせう。イエス様がいつも求めておいでになつた心です。

かういふ立派な國柄と美しい心を持つてゐる國民ですから、起居振舞は正しく、考へる所も隠やかです。で、ムツリニは道義國日本と呼んで、日本のすることはいつとも賛成し協力してゐます。

我々はいふ立派な國に生きてゐるのです。何んと嬉しい事ではありませんか。ですからこの國に少しでも暗い影のさすやうな事を考へたり爲たりする人の出て來ないやうに、皆が深く正しくなる事を勵まねばなりません。

神武天皇が大八洲をしるしめさんとして橿原に都をお築になつた時「八紘一字」天下を一つの家として親しまふではないかと仰せられ、今上陛下も日獨伊三國が條約を結んだ時、此度の戦は世界の國々をみんな自由にして、今迄の様に強い國にいちめられてゐる國をなくし、人民を皆安樂にしてやる爲の戦だと仰せられ、日本が如何に立派な事を考へ行つてゐるかを世界にお示しになりました。多くの兵隊さんはこの目的の爲に戦つてゐるのであります。私たちも早く立派な世界の出來上ることを祈り、その爲に私たちがめいめい日本帝國臣民として恥ぢない者となる爲に益々神様の教に従ひ、光の子となるやうに勵みませう。

(おおやしま)

資料5 令和書籍『国史教科書』検定合格に対する抗議文

2024年8月17日

文部科学大臣 盛山正仁様

日本キリスト教協議会（NCC）教育部
全国キリスト教学校人権教育研究協議会

令和書籍『国史教科書』の検定合格に抗議し、撤回を求めます

かつての日本の侵略戦争への反省に立って、平和教育・人権教育に取り組んでいる立場から、わたしたちは今年4月、文部科学省が「検定未了」としていた令和書籍『国史教科書』を中学校の社会科教科書（歴史）として、追加で「検定合格」させたことに強く抗議するとともに、撤回を求めます。

この書籍は、最初から最後まで、天皇を中心として国家形成してきた日本は、他国と比べて優秀で特別な国という、まるで戦前の「国史」教科書に戻ったような「皇国史観」で買われています。したがって、かつての日本の侵略戦争と植民地支配の加害の事実への反省がまったく見られません。例を挙げると、「韓国併合」=韓国の植民地化は大韓帝国の皇帝から依頼されたもので、むしろ日本は犠牲を払って韓国の近代化に貢献したという立場に立ち、植民地支配を正当化しています。関東大震災時の朝鮮人・中国人虐殺については一言の言及もなく、日本軍「慰安婦」=性奴隷制問題については、強制性や戦場の連れまわしを否定して、歴史研究で明らかになっている事実を改ざんし、韓国が問題を「蒸し返している」などと韓国に責任を押し付けています。過去の歴史の事実を学ぶ教科書であるのに、「戦争賛美」の視点から事実を捻じ曲げ、「愛国心」を喚起しようとしているのです。

ひとつひとつ問題を指摘すると限りはありませんが、特に教育に携わる者として見過ごせないのは、この書籍が戦前の国家体制を支えた「教育勅語」を称賛し、「よき伝統」と評価していることです。天皇のために、国家のために死ぬことが最も尊い生き方であるという価値観を国民に植え付け、多くの未来ある若者を戦死に追いやり、多くの子どもを戦争協力に駆り立て、多くのアジアの民衆の命を奪った「教育勅語」を礼賛することは許されません。

文部科学省の図書検定基準には「近隣のアジア諸国との間の近現代の歴史的事象の扱いに国際理解と国際協調の見地から必要な配慮がされていること」と明記されています（第3章1の(6)、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/kenitei/1411168.htm）。この基準に照らせば、到底あり得ない「検定合格」です。

令和書籍は中学生ばかりでなく、教職員や社会人が「国史」を学び直すために使用してほしいと、表紙に「検定済 合格」の文字を入れた同書を市販しています。歴史学の成果を無視し、教育史の反省を踏まえられない書籍に検定合格の「お墨付き」を与えた文部科学省の責任は重大です。わたしたちはこれまで、歴史修正主義に立つ育鵬社、自由社の歴史ならびに公民教科書に異議申し立てをしてきました。この度は、令和書籍『国史教科書』の検定合格を撤回するよう、強く求めます。

<連絡先>

全国キリスト教学校人権教育研究協議会
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-21
日本キリスト教協議会（NCC）教育部